

連載 オブジェクト指向と哲学

第 53 回 ヘラクレイトス - 万物流転と動的平衡

河合 昭男

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~Kawai>

ソクラテス以前の哲学者の始祖として、東のタレスと西のパルメニデスを取り上げてきました。今回は、彼らが開いたミレトス派やエレア派とは一線を画して独自の思想を展開したヘラクレイトスに注目します。パルメニデスの生成・変化を認めない立場と真逆の万物流転をとなえましたが、こちらの方が日本人には受け入れやすいし、我田引水ですが、オブジェクト指向的でもあります。

ヘラクレイトスはミレトス市よりすこし北方のエフェソス市の王族の出身。前 6 世紀末から前 5 世紀前半に思索し著述した。火の説と万物流転の説とで著名[4]。

アクメーは前 500 年頃で、タレス、クセノパネス、ピュタゴラスらの教説、人がらを、何らかの意味で知っていたことは、彼らについて言及する断片から推察することができる[2]。



Google Map に追加

図 53-1 ソクラテス以前の哲学者

●万物流転

ヘラクレイトスといえば「万物流転 (パンタレイ)」です。生成・変化を認めないパルメニデスの思想と正反対です。

--

同じ川に二度入ることはできない。(断片 91)

--

水は次々流れてきては流れ去ってゆく。川の流れは時々刻々変化しているが、水に入るあなた自身もまた日々変化している。一体「川」とは何だろう？そもそも自分自身とは何だろう？

--

私は、自分自身を探求した。(断片 101)

--

ミレトス派やエレア派にはなかった宗教的ともいえる観点です。『宇宙世界の生成の問題が中心の課題とされていたかみえた、これまでの哲学的思惟とは異なって、ここでヘラクレイトスは端的に外の世界の在りようをではなく、むしろ自分自身の在りようを、直接に追求したと語っている[2]』

--

自己を認識すること、そして思慮を健全にたもつことは、すべての人間にゆるされていることなのだ。(断片 116)

--

『汝みずからを知れ (グノーティ サウトン)』と、デルポイの神殿に書かれています。プラトンの対話編「プロタゴラス」では 7 賢人が奉納したとソクラテスが語りますが、その中にヘラクレイトスの名はありません。

--

・・・ともに相会してデルポイの神殿におもむき、かの万人の口に膾炙している『汝みずからを知れ』『分を超えるなかれ』という句を書きしるし、もってこれを彼らの知恵の初物としてアポロンに奉納しているのであります。(343B [5])

--

ヘラクレイトスは川の流れを見て思いに耽ります。これは日本人の無常観と通じるものがあります。

--

「ゆく川の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例 (ためし) なし。世中にある人とすみかと、またかくのごとし。……」(方丈記) [6]

--

鴨長明（1155 - 1216）も川の流れを見て思いに耽りますが、考えることは異なります。ヘラクレイトスは自然現象から宇宙の営みにまで思いを馳せます。鴨長明は人間社会の無常を川の流れに感じます。それぞれ常に変化してゆくものの象徴として川を捉えます。

--

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。……」（平家物語） [6]

--

平家物語に川はありませんが、無常観は方丈記と通じます。これらの無常観はヘラクレイトスの万物流転とは観点が異なります。

●ヘラクレイトスの太陽

--

太陽は日々に新しい。(断片 6)

--

プラトンの「国家」に「ヘラクレイトスの太陽」という記述があります。太陽はずっと恒常的に輝いているのではなく、毎日夕方になると一旦火が消えてしまうが、朝になるとまた新たに燃え出す、というような説です。毎日夕方消灯し朝点灯する電灯のようです。

ちなみにプラトンがヘラクレイトスの影響を受けたことは、アリストテレスの形而上学にも記されています。

--

若い頃からプラトンは、初めにクラティロスに接してこの人のヘラクレイトス的な見解に親しんだ、そして - この見解では、およそ感覚的な事物はことごとく絶えず流転しているので、これらの事物についての真の認識は存し得ないというのであるが、- この見解をかれは後年にもなおその通りに守っていたからである。(987a30 [4])

--

●動的平衡 (dynamic equilibrium)

「生命とは何か？」という問いに、「生命とは動的な平衡状態にあるシステムである[7]」と福岡伸一博士は「動的平衡[7]」で述べられています。

--

可変的でサステイナブルを特徴とする生命というシステムは、その物質的構造基盤、つまり構成分子そのものそのものに依存しているのではなく、その流れがもたらす「効果」であるという

ことだ。生命現象とは構造ではなく「効果」なのである。[7]

--

生きているということは、常に新陳代謝により内部の細胞を継続的に入れ替えていることである。

--

私たちの身体は分子的な実体としては、数ヶ月前の自分とはまったく別物になっている。分子は環境からやってきて、一時、淀みとしての私たちを作り出し、次の瞬間にはまた環境へと解放たれていく。[7]

--

ならば「私」とは一体何でしょう？肉体は一時の淀みに過ぎない。生きていながら肉体を構成している分子は流れ去ってしまうが「私」は依然として存在している。ヘラクレイトスも、自分自身の肉体が川の流れのように時々刻々と入れ替わっていることには気付かなかつたのではないのでしょうか。

地球上の数十億の人間も、日々生まれるものと死ぬものがいて個体は入れ替わっているが種として存続している。広い意味で動的平衡を保っています。

ならば生物のみならず川も生きている。川の水は常に入れ替わっているが、それでも川という実体は動的平衡を保ちつつ存続する。

●万物流転と動的平衡

--

宇宙世界はつねに変化しながらも、しかし全体としては同じものでありつづける。宇宙世界は無規定的ではなく、一定の限界をもつ意味で、それは秩序世界（コスモス）である。[2]

--

ヘラクレイトスの万物流転の思想は、宇宙世界が動的平衡であると言っている。宇宙は固定した状態ではなく、次々と新たに生成され消滅する個体 - つまり流れ去るもの - で構成されるコスモスという普遍なものが動的平衡を保って生きている。細胞は形成され数ヶ月で消滅し、人は誕生し数十年で死に、星が誕生し数十億年？で消滅する...（以下次回）

参考書籍

[1]今道友信、西洋哲学史、1987、講談社学術文庫

[2]廣川洋一、ソクラテス以前の哲学者、1997、講談社学術文庫

[3]クラウド・リーゼンフーバー、西洋古代・中世哲学史、2000、平凡社ライブラリー

- [4] アリストテレス、【訳】 出隆、形而上学、1959、岩波文庫
- [5] プラトン、【訳】 藤沢令夫、プロタゴラス、1988、岩波文庫
- [6] 斉藤孝、声に出して読みたい日本語、2001、草思社
- [7] 福岡伸一、動的平衡、2009、木楽舎